

Tsunami Tourism in Indonesia: Creating Contemporary Muslim Images of post-tsunami Aceh

SAITO, Chie[†]

Abstract

Rebuilding a society devastated by a disaster does not mean building a copy of the society before the disaster, but a society coping with problems that existed before the disaster. Likewise, tsunami tourism that the Acehese government has created and promoted has provided the image of a reconstructed Acehese society, which was once devastated by the 2004 Indian Ocean Tsunami; this has led to resolving some problems that existed before the tsunami. This paper examines the image of the reconstructed society that the Acehese government has produced through tsunami tourism and the problems it has tried to resolve or ignore. Tsunami tourism has not necessarily set out to resolve problems the tsunami victims suffered.

Keywords

disaster tourism, tsunami, Islam, disaster mitigation, Indonesia

インドネシアにおける津波観光 —アチェにおける今日的ムスリム社会像の創造—

齋藤 千恵[†]

キーワード

災害観光, 津波, イスラム教, 防災・減災, インドネシア

1. はじめに

2004年インド洋津波は、史上最大の自然災害の一つに数えられる広域災害である。インドネシアをはじめとする複数の国や地域から大きな被害を出した。津波を引き起こした地震の震源に近いスマトラ島のアチェ州沿岸

部の被害は、特に深刻だった。死者・行方不明者は12万人を越え、多くの人々が住む家を失っている (OCHA 2005)。この災害の被災地には国際的な援助機関や世界の様々な国や地域から援助の手が差し伸べられた。アチェ州には、被災の翌年、2005年の一年間で、400

[†] csaito@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

以上の援助団体がインドネシア国内外から訪れている（BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005）。こうした中でアチェ州観光局は津波観光をスタートさせた。

同局は、被災から数か月後に地震・津波一周年記念行事を案内する冊子を発行し、それには、既に津波と観光を結びつける記述がある（cf. Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005a）。そして、地震・津波一周年記念式典では、『津波観光』（Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005b）と題したリーフレットが配布されている。式典には、被災者を含む地元の人々の他、援助や復興のために被災地を訪れた様々な国の出身者が出席した。このため、このリーフレットは、英語とインドネシア語で書かれている。ちなみに、これ以降のアチェ州観光局発行の津波観光パンフレットも、英語とインドネシア語併記である。

2005年の時点での津波観光は、津波の爪痕そのままの場所や仮設住宅、津波犠牲者の集団埋葬地などが見学スポットを構成していた。その後、復興過程において、津波の爪痕のいくつかのものが、観光スポットとして整備されていった。2009年には、これらに、津波博物館が加わった。復興過程を通して、幾度も改修がなされ、入念に整えられた観光スポットを擁する津波観光は、これらを通して、復興後のアチェ社会のイメージを発信している。

アチェ社会は、歴史的にイスラム教と深いかわりを持ち、津波観光においても、ムスリム社会として特徴づけられている。しかし、津波観光が提示するアチェ社会のイメージは、被災前のアチェ社会をコピーしたイメージではない。防災・減災の要素などを取り入れた復興後、あるいは、今日的ムスリム・アチェ社会のイメージを提示する。本論では、津波観光を通して描かれる自然災害や復興、復興後のアチェ社会像について論じる。この際、Wisner

ら（Wisner et al. 1994）に従って、災害を、社会的、政治的、経済的要因が環境に作用して起きるものとして捉える。この捉え方は、被災社会の再建・復興にも関連する。災害からの復興は、被災前の社会をそのままそっくり出現させることではなく、被災前からあり、災害により顕著になった問題に対応することが重要となってくるからである（オリヴァー＝スミスとホフマン2002:13-15, 山本 2014:26）。

Pezzullo (2009)によれば、自然災害観光についての研究は、マネジメント分野のものを除けば極めて少ない。とはいえ、Pezzulloの研究も含め、20世紀末や21世紀になって起こった大規模災害を題材とする観光についての研究が見られるようになった。自然災害をテーマにした博物館の展示（塚本、矢守 2010）や記念碑についての議論（今井 2001）、災害関連の展示の説明文（王 2015）や被災地ツアーにおけるナラティブについての研究（Thomas 2009）といったものである。

Pezzullo (2009)自身は、被災地ツアーを経て露わになった社会的問題を通して、国家の在り方やその成員権を巡るディスコースを扱っている。深刻な被害をもたらした災害は、しばしば社会がどうあるべきかという問いを投げかけのである。これは、過去の当該社会のあり方に言及するとともに、復興した被災社会がどうあるべきかという問いを含む。こうした災害を、ホスト社会のイメージの発信が重要となる観光が、そのテーマとした場合、如何なる観光地のイメージが発信されるのか。本論は、アチェ政府が演出する災害観光に関して、これを論じていく。

この議論のために、以下でまず被災前のアチェ社会について概説した後、被災後の津波観光のはじまりについて、次いで、津波被災後の2005年以来変化し続け、より入念な仕掛けを含むようになってきた津波観光スポットや観光案内について論じていく。

2. イスラム教, 自由アチェ運動, 紛争

イスラム教はアチェ社会を特徴付ける宗教である。すでに, 13世紀にはイスラム教化が始まっていたという記録が残っている。16世紀初頭にマラッカ帝国が陥落し, その後はアチェ王国が勢力を伸ばしていった。アチェの勢力伸長とともに, イスラム教布教の勢いも増し, スマトラ島沿岸にイスラム教化が拡大している (Ricklefs 1981)。

アチェ王国の拡大とイスラム教布教の勢いは相関関係にあった。16世紀の終わりにかけて, アチェはマラッカ海峡で極めて強力な軍事力を展開した。当時, マラッカ海峡で力をふるっていたのは, ポルトガル, アチェ, ジョホールであった。ジョホールはオランダと同盟関係を持ち, これに対抗する形で, アチェとポルトガルが同盟を結んだ。スルタン・イスカンドル・ムダの治世になると, アチェは黄金期を迎えた。イスカンドル・ムダは軍事力を増強し, ジョホール王国を打ち負かした。1614年にはポルトガルを敗退させ, パハン, クダ, ジョホール, ニアスを占領した。同じころ, アチェは, 重要な交易の拠点の一つになった。都市部では, 民族的に多様な人口構成が見られるようになり, マレー語が主要言語となった。(Ricklefs 1981:30-32)。

交易は, スルタンの一族が独占していき, やがてアチェはイスラム色の極めて強いマレー文化を形成していった ((Ricklefs 1981:47-48)。この頃には既に, アチェはメッカのベランダという異名を持っていた。この呼び名は, アチェがアラビアへの入り口として, また, 東のメッカとして認識されてきたことを表している (Riddle 2006: 39)。

イスカンドル・ムダの後継者たちがアチェ王国を支配するようになると, アチェは今までの勢力を保つことはなくなった (Ricklefs 1980: 32)。とはいえ, アチェは, 19世紀の前半には, 当時のスパイス貿易で扱われる胡椒の

半分の量を生産し, 再び豊かになりつつあり, 政治的な力も盛り返していった。オランダは植民地勢力を拡大していくが, アチェは, トルコからの保護を頼み, 英国と協定を結ぶことで, オランダの支配下にはならなかった。ところが, 1873年, 伝染病と大量に投入されたオランダ人部隊により, アチェ人はクタ・ラジャ(現在のバンダ・アチェ)を放棄しなくなかった。そこにオランダ軍が流入し, アチェの平定を宣言したのであった。しかし, 実際には, この宣言後もアチェのオランダ植民地勢力に対する抵抗は続いた。1903年までに, オランダ植民地政府は, オランダに協力的なアチェのウレバラン(領主)たちとの同盟関係を築き上げ, その上, アチェ軍のリーダーであったパンリマ・ポレム・ムハンマドを降伏させた。一方, アチェのウラマ(イスラム教学者・リーダー)たちは抵抗を続けていた。この抵抗運動は, アチェ戦争と呼ばれ, 少なくとも1912年までは続いていたとみられている (Ricklefs 1980: 135- 138)。

第二次大戦終了後, インドネシア諸島では, 敗北を喫した日本軍に代わってオランダ勢力がその支配を取り戻そうとしていた。その中で, インドネシア独立宣言がなされた。アチェでは, オランダ植民地勢力の返り咲きを期待するウレバランたちと, 革命を支持するウラマたちとの間の闘争が続いた。結局オランダ植民地政府がアチェを支配下におさめることはなく, ウレバランとその家族は, 殺害されたりその領土から追放されたりした。こうした出来事の末, アチェのリーダーにはウラマが残り, アチェはイスラム・イデオロギーが支配的な社会となった (Ricklefs 1980:208)。

さて, アチェの歴史の中には, 植民地闘争とともに注目される運動がもう一つある。自由アチェ運動 (GAM: *Gerakan Aceh Merdeka*) である。これは, ジャワ人が支配的なインドネシアからの分離・独立を目的にした運動であった。

この背景には、インドネシア政府がアチェ州の資源開発から得た収益の多くを取得していることに対する不満があった (Nessen 2006)。

アチェは、強力なイスラム・アイデンティティで知られる地域であるが、イスラム国家樹立を目指していたわけではない。GAMは、ネーションとしてのアチェの成立を求めていった (McGibbon 2006: 332-334)。(1) アチェの強力なムスリム・アイデンティティを裏打ちするものに、当該州におけるイスラム法実施があるが、これは、紛争中にインドネシア政府がGAMに対して提示した和解のための妥協案であった。GAM自体、イスラム法の実施を、インドネシア政府が、アチェをファナティックなムスリムとして印象付けるためのものと見ている (McGibbon 2006: 332, 333)。

こうした案をインドネシア政府は提示したものの、インドネシア軍によるGAM抑圧は、激しさを増していった。20世紀の終わりごろから津波被災直前まで極めて激しい暴力行為が行われ、多くの犠牲者を出していた (Reid 2010: 139-141)。メガワティ政権下では、アチェは、2003年5月と11月の二回、戒厳令下に置かれ、それぞれ1165名と1963名、GAMあるいはGAMと軍によりみなされた人々が殺害されたと言われている (Schulze 2006: 247, 251)。その後激烈を極めたこの紛争は2004年インド洋津波をきっかけに終結したのであった。

3. 津波と津波観光

一連の研究者が示しているように、現代社会において、災害からの復興は、災害前の社会の再現ではなく、しばしば被災前に存在した問題に対処した社会を出現させることが重要となる。アチェ政府やインドネシア政府も、2004年インド洋津波からの復興を同様に考えた。世界銀行とBRR(復興庁)によれば、被災前のアチェ社会を再現させるならば、インドネシア政府が提示したマスタープランの半分の予算しか



図1 スマトラ島アチェ州
出典：MARKIJAR.com

必要ではなく、政府が提示した予算は明らかに「津波前よりもずっと高いクオリティのサービスやインフラを再建」(BRR and the World Bank 2005:xv) をしようとすることを表すのである。

3.1. 克服されねばならない問題

被災から間もない2005年の時点で、設立されたばかりの復興庁は、被災社会の再建のために克服されねばならないいくつかの問題を挙げている。それらは、(1)アチェ政府の機能回復、(2)土地所有の明確化、(3)家屋の再建、(4)交通手段とインフラのニーズの充足、(5)上下水道の整備、(6)教育の再開、(7)公共医療の回復、(8)生業の回復、(9)平和の維持、(10)セーフティネットの設置、(11)被災後の住居に関する不適切な政策の解消、(12)復旧プログラムに関するアチェ政府への助言と技術的援助及びプログラムの監視である (BRR and World Bank 2005:xvi-xxii)。

復興庁によれば、アチェ政府の機能不全は、災害によるものというよりも、それ以前からのものである。また、平和の維持の重要性も、被災前に存在したコンフリクトに起因している。被災前の状況から、復興庁は、コンフリクトが再燃した場合の復興の遅れを懸念している。被災後に構築された平和自体が復興計画の重要な一部をなしているのである (BRR and World Bank 2005: xxii)。復興過程において、外国か

らの投資や観光客を誘致しようと努力することになったアチェ社会にとって、平和は経済開発に必要な不可欠な条件であり、また、津波被害からの復興は、紛争からの復興とリンクしているのである。

これらの問題の他に、インドネシア外から訪れた援助関係者や専門家たちやNGOのスタッフの間で、問題視されていたことがいくつかあった。一つは、災害がアチェ社会に広く受け入れられているイスラム教の文脈において語られていたことであった。宗教的な枠組みの中で災害が見られることを、科学的な理解の不在と見なし、これを問題視する非インドネシア人防災専門家もいた。二つ目は、相続権を含めた女性の権利と地位の問題である。アチェ社会で実施されているアダット（慣習法）とイスラム法において、女性が相続するものは男性のそれとは異なる。アチェのアダットの場合、相続すべきものが相続者の性別により異なることから、女性が不利益を被る場合もあれば、男性が不利益を被る場合もある。しかし、イスラム法の場合は、女性の相続分は、男性のそれより少なく、それが不利益として捉えられた。また、津波被災の際に、女性の犠牲者が多かったことも話題に上がり、女性が特に、津波災害に対して脆弱であることが議論されてきた（e.g. Ross 2014）。これらに加え、国際的NGOやインドネシアの女性団体は、女性の社会的、経済的な地位の低さを問題視して、被災後のアチェで活動してきた。⁽²⁾

第三に、イスラム教徒の間の信仰の問題である。被災地やアチェ社会の周辺で言われてきた津波の原因の一つは、宗教的な逸脱であった。被災の数年前に施行されたイスラム法から大きく離れた行為、例えば飲酒、麻薬の使用、性的な放縦である。また、アチェ社会外では、社会関係を大きく破壊したと言われるインドネシア軍とGAMの間の紛争も、津波の宗教的原因として挙げられている。

様々な問題が、復興過程において政府やNGOにより、様々に対応されてきた。観光という文脈においても、問題への対応が見られた。観光を通じた雇用の確保や経済発展がアチェ社会の復興の一助になってきた他に、観光を通して防災・減災教育をする重要性も唱えられてきた。

3.2. 注目された災害と津波観光

2004年インド洋津波は、世界的に注目された災害であった。(Olds et al. (2005)は、こうした世界的な注目を、多くの白人観光客が犠牲となったことに求めている。)アチェ州の被災地にも、インドネシア国内外から、救助や援助、復興などのために多くの人々が訪れた。⁽³⁾ 諸外国の政治家、研究者や学生、そのほか俳優などで世界的に著名な人々や一般の人々も視察に訪れた。こうして紛争時代には訪れなかった多くの人々がインドネシア各地や諸外国からアチェを訪れ、これが、アチェ津波観光開始のきっかけになった。

津波観光の目的のひとつは、経済発展であり、これは、多くの観光客がアチェを訪れることにより実現するとアチェ州観光局は述べる。津波・地震一周年記念で配布されたリーフレット『津波観光 (Wisata Tsunami)』には、見学者が多数訪れる被災地を「新観光リゾート」と捉え、「観光客を魅了する貴重な強み」(Dinas Pariwisata Provinsi Nangroe Aceh Darussalam 2005b)と紹介している。更に、2010年発行の津波観光パンフレットでは、インドネシア語で、津波観光がもたらす効果として、「地域経済の活性化や地元民の雇用機会の増加」を述べ、英語では、雇用機会の記述の代わりに「貴重な外貨を獲得する」ことを挙げている(Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010: 1)。

津波観光のもう一つの重要な目的は、災害についての記憶の保存と共有、そして、減災・防災である。この目的は、観光パンフレット等を通して、明確に述べられている。例え

ば、2005年発行のリーフレットには、「[津波の] 爪痕は我々に何を語るのか? 歴史というのは、人類にとって価値ある経験である。出来事を振り返ることで、人類はそうした災害の衝撃を最小限にするために過去から学び、より賢明になることができる」(Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005b)とある。また、2010年以來の津波記念式典で配布されている『アチェー津波の悲劇から津波観光へー』と題されたパンフレットには、「…『将来のリスク軽減』に関して人々の意識を高める」(Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010: 2)という観光目的が挙がっている。更に、その一年後発行された津波観光パンフレットには、「災害によるインパクトを次世代に思い出させるし、将来、社会に防災意識を育てる」(Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011: 1)ものとして津波観光を位置付けている。こうした観光案内を通して、アチェにおける観光が防災や減災の目的を持つものとして観光客に示されるのである。

防災・減災という目的を持ち、経済発展を目指すアチェの津波観光は、地元政府によって、他の大規模自然被災地に対してモデルとなるものとしても示されている。例えば、2015年に宮城県で開催された国連世界減災会議に出席したバンダ・アチェ市長は、アチェの津波観光を評価し、東日本大震災で大きな被害を出した東北地方に対し、災害による破壊の跡を生かし経済成長を果たすための災害観光を推奨している(Miyazaki 2015)。

経済発展と防災・減災という二つの大きな目的を以て、津波観光は、被災により一度壊滅した地域で、被災前に存在した問題に対処し、被災前とは異なるアチェ社会を描き出そうとする。もちろん、新しいアチェ社会像にも、アチェの文化的特色は多分に見出すことができる。アチェ社会の馴染み深い特徴は、復興という新しい文脈の中で新たな意味やイメージを作

り出しているのである。その特徴の中で欠かすことができないものの一つがムスリム・アイデンティティである。

4. 津波観光とイスラム教

アチェでは、2004年インド洋津波は宗教的に解釈されることが多い。何故、津波がアチェ社会を襲ったのか、何故、自分や自分の親族が被害にあわねばならなかったのか、あるいはサバイバルしたのか、宗教的解釈は、そうした問いに答えを示す。こうして出された答えの中には、被災者の人生や社会を変える方向性を持つものもある。

アチェの被災地では、何故津波が起こったのかという問いに対して、様々な答えがイスラム教の教えの枠組みの中で提示されてきた。災害により家族を全て失ってしまった人たちの解釈は、そうでない被災者のそれとは異なっていたし、被災者の解釈と被災後に被災地に入ってきた人々の解釈も異なる。津波による親族の死を信仰の中で迎えた殉死であると言う人は少なくない。家族の中で自分一人だけ生き残った人々は、津波を試練や警告と捉える傾向があった。その一方で、災害は、イスラム法から大きく逸脱した行為の報いであると解釈された。

観光客がよく訪れる被災地のビーチの土産物屋で売っていた津波の様子を記録したDVDやバンダ・アチェの本屋に売られている本などにも同様の解釈がみられる。津波の原因を、イスラム法からの逸脱、例えば、性的な放縦や麻薬や酒の常用といったもの、政治的には紛争時のGAMによる社会関係の破壊(Anonymous n.d.)などに求めているのである。

一方、アチェにおける観光では、津波は、イスラム教の枠組みの中で解釈されるものの、宗教的に明確に津波の原因を求めることはしない。津波を罰や警告として捉えないことにより、被災前のアチェ社会の評価を明確にしないのである。それよりも、津波による大きな破壊

を津波の爪痕を通して物語ることにより、アッラーの偉大さや神の業の神秘性を強調する。そして、社会が破壊されても、イスラム教は存続することを示し、被災後の新しいムスリム・アチェ社会の誕生を暗示するのである。

4.1. 津波観光における非日常性

2005年発行のパンフレット(Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005a)には、津波被害の深刻さを訴える写真がいくつも掲載されている。バンダ・アチェの中心街にあるホテルに、船が突っ込んでいる様子もその一つである。この写真は、見開き2ページを使って掲載され、その紙面の使い方とバンダ・アチェの中心街に宿泊している人々には見覚えのあるホテルと、その柵を破って敷地内に入り込んでいる船の写真を通して、津波の迫力を表現している。ほかにも陸に運ばれた船や瓦礫ばかりの町の様子を写した写真が掲載され、津波による破壊を表している。こうした写真を「その災害〔2004年インド洋津波〕は、大自然の悲劇であり、神の全能の力を象徴する」(Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005 a:13)と説明している。陸に上がった船やあたり一面の瓦礫といった光景は、非日常的な印象を生み出す。こうした光景を、災害の破壊力の大きさや人間の営みの脆さを表すと解釈するとき、災害により生じたこの光景は、全てをコントロールする神の偉大さに繋がるのである。

同じ年に発行された津波観光リーフレット(Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005b)においても、津波による大規模な破壊とそれに続く緊急事態の写真が多用されている。これらを通して、人の営みが「神の全能の力の前で如何に小さいか」を示し、神の偉大さを説いている。

この八ッ折のリーフレットを広げると、まず最初に、瓦礫の中にインドネシアの国旗とインドネシア語が書かれた看板が立てられている写

真が出現する。インドネシアの国旗と看板が瓦礫の写真の中にあることにより、国家の出動がある程尋常ではない破壊が起こったことを示す。白い看板に、赤い字で書かれているのは警告である。⁽⁴⁾ インドネシア語が分からない者にも、瓦礫の中に国旗と看板が立てられていることで、事態の異常さが伝わるだろう。

このリーフレットには、他にも津波による破壊の様子が表されている。瓦礫の写真もあれば、陸に乗り上げた船、地面に落ちた屋根や奇妙な角度で静止している自動車の写真もある。特に目を引くのは、他の写真よりも大きく掲載されている瓦礫の中に倒壊せず建っているモスクの写真と陸の上の巨大な船の写真である。同様の写真が津波観光パンフレットや博物館などで展示され、津波の大きな威力を示している。

4.2. 陸に乗り上げた船

津波観光案内には、必ず陸に乗り上げた船の写真が掲載されている。中でも、巨大発電船と「家の上の船」と呼ばれる漁船は有名である。「家の上の船」は、海から3kmほど離れた村の個人宅の上に乗っている漁船である。発電船は、PLTDアプン号と呼ばれ、津波前は、アチェの電力需要を賄うためウレレ港に停泊していた。これが、津波により内陸部に3、4kmほど運ばれたのであった。両方の船とも、年を経るごとに見学者を意識した工夫が施された設備を持つ様になっていっている。発電船に関しては、被災後2、3年の内に国際NGOの援助で、この船を取り巻く様に津波公園が造られ、津波に関する知識と被災の様子を展示する施設も設置されたのであった。2013年にリニューアル・オープンした際には、船の周囲に、被災により全壊した家々を配置し、その家々を上から見ることが出来る通路が設けられていた。この通路を通り、船の上上がった人々は、上から地面を見下ろすことで、船が如何に大きいかを認識した。

津波観光において、この船を通して、津波の

威力が示されている。巨大で重量も数千トンであるから、これを内陸部へ運んだ津波の威力が押し量られるというわけである。こうした津波の威力はイスラム教の文脈では神秘的に語られる。

観光案内には、アプン号の大きな写真が掲載され、以下の様に説明されている。

NAD〔ナングロ・アチェ・ダルサラム州、現アチェ州〕における電力不足のため、この船は、アチェに送られウレレ港に繋がれた。津波がアチェを襲った時、一千トンを越えるこの船は、プンゲまで4 kmほど陸を流れていった。流されていく中で、この船は多くの人々を助け、また流されていく道すがらいくつかのモスクがあったにも関わらず、どのモスクも破壊しなかった (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005b)。

大災害の中、巨大船が4 kmも津波によって運ばれ、なおかつ、途中にあるモスクをどれも避け、その上、流されていく人々をその上に乗せて助けるという出来事は、津波において神の配慮が働いていた、あるいは、人間の営みを破壊し尽す災害も神のコントロールの下にあったという印象を与える。

2010年に発行された観光パンフレットにも、この陸に流された船は、津波の威力と神の偉大さを示すものとして取り上げられている。巨大な船が陸地へと流されたこと自体をあり得ない出来事と捉え、「驚くことに、この船は、津波によりウレレ港からほぼ3 km流された。この奇跡は、全知全能の神の偉大さを我々に示す」(Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010:22)と述べている。こうして観光局が演出する津波観光において、津波の威力は、破壊の跡と陸にある船といった非日常的な光景で示され、それは、そのまま、全知全能で全てを創造した神の偉大さとして提示される。

一方、船がモスクを避けて通ったり、人を助けたりという擬人的な表現を用いて神秘化した出来事の記述は、被災から数年を経たころには

見られなくなった。被災後数年を経ても神秘的に語られるのは、被災時のモスクに関してである。

4.3. 倒壊しなかったモスク

イスラム教の教えの枠組みの中で、津波を語る時重要な役割を果たしてきたのが、津波の直撃を受けても倒壊しなかった海辺のモスクである。津波観光では、こうしたモスクが、度々紹介されている。例えば、写真1のモスクである。この写真は、巨大発電船を囲む様に造られた津波教育公園の防災教育用パネルのものであるが、同じ写真が津波博物館にも展示されている。

津波教育公園のパネル展示⁽⁵⁾では、津波発生の科学的メカニズムや災害規模が示されている図や写真に続いて、アチェの津波被害と復旧の様子が説明文と写真で示されている。瓦礫に埋まる自動車や分断された道路、陸上を波によって運ばれた巨大発電船、何も無くなった水浸しの土地といった写真の中に、写真1のモスクの写真がある。

津波で周囲の建物が破壊され、その瓦礫も撤去された更地に、モスクのみが建っている写真である。この写真のパネル説明には、「周囲の建物が、マグニチュード9.3の構造地震に続く津波により根こそぎにされた中で助かったアチェ・ブサールのチョチェムパ地域のモスク」とあり、続けて「2004年インド洋津波では、アチェの多くのモスクが巨大津波の打撃を受け



写真1 津波公園に展示されたモスクの写真

でも助かっている」という説明が付け加えられている。

パネル展示の中で、全てが瓦礫になってしまった有様を写し出している一連の写真の中に、津波後も建っているモスクの写真を入れることで、モスクの特別さが強調される。津波博物館においても同じ展示のされ方が見られる。津波観光リーフレット (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005b) にも、同様に、破壊されたアチェの様子を写した一連の写真と共に、津波直後の海辺の村のモスクの写真が掲載されている。被災前のモスクの写真もその横に添えられ、被災後もモスクだけは、ほぼ問題なく建っていることを示している。

人間の営みが破壊されても、宗教施設が残っている様子は、神の偉大さを示すと解釈される。その一方で、被災地では、開口部が大きく、また、多かったので、倒壊を免れたという建築的な側面からの説明も聞かれた。アチェ観光局により発行された津波観光案内においては、建築的な側面からの説明ではなく、神の加護が働いたというイスラム教の教えの枠組みの中で倒壊しなかった原因が語られている。

前出のリーフレットでは、モスクが神によって守られていることが次の様に述べられている。「モスクは神の家である。それだから、それを守ったのは神である。あれほどまでに破壊的な津波の襲来でも『家』であるこの建物は倒壊しなかった。例え壊れたとしても、部分的である。一方、その周辺地域は完全に廃墟となっていた」 (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005b)。

2010年発行のパンフレットでは、イスラム教の枠組みで更に神秘性が強調されている。このパンフレットでは、バンダ・アチェ市の中心にある大モスクに起こった奇跡について「門のところで [津波の] 水がほとんど止まった」 (Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010:14)

と述べられている。津波が大きな破壊をもたらした、アチェ社会が壊滅的状态に陥った中で、イスラム教信仰の象徴であるモスクのみ残っている様子を描くことは、イスラム教を継承した新しいアチェ社会の出現を暗示していると捉えることができる。

現在も大モスクは津波前と同じ様に市内に建っているが、津波によって倒壊しなかった海辺のモスクは、復興過程において建て直されていき、当時の姿は写真でしか見ることはできなくなった。災害時モスクが倒れなかったこと、モスクの屋根に打ち上げられた人々が生き残ったこと、こうした話は、被災地では忘れられていない。上記の様に、被災から5年後も、被災したモスクに関わる神秘的な話が、引き続き津波観光案内に登場している。しかし、その他の津波遺物にまつわる神秘的な解釈は、2010年を過ぎる頃には津波観光案内においては語られなくなり、津波観光の傾向自体にも変化が見られるようになった。

5. 防災、科学、津波観光

防災・減災教育という目的を持つ津波観光では、復興過程の中で、テクノロジーや科学という要素が強調される様になった。防災教育に関しては、被災から間もない頃、インドネシア国外から訪れた防災の専門家たちがその重要性を強調していたものである。彼らは、津波や地震のメカニズムを被災者たちに科学的に説明するという努力を、アチェで行っていた。彼らの中には、アチェの人々は宗教的であるあまり、科学的な津波のメカニズムを受け入れないと思いつむ人もいた。しかし、科学はアチャーが創造した世界の説明原理のひとつと見る他の多くのイスラム教徒同様、アチェの人々も科学に対して関心を持っているし、津波や地震に関連した科学的あるいは実際的な問題もアチェの人々の間で議論されてきた。科学的な津波発生メカニズムを認めつつ、イスラム教的な文脈での津

波の原因が語られた。

現在のアチェ社会では、特に観光においては、イスラム教は科学と矛盾するものとしては表されていない。科学とイスラム教は、並立して示されているのである。

被災後のバンダ・アチェ市内の風景自体もそれを示している。町には、モスクと共に、最新の技術を使用したと思われる建造物が建っている。その代表的なものは、バンダ・アチェ市役所であり、津波災害緩和研究センター（TDMRC）や津波博物館、海辺に特定の間隔を以って建てられている4階建ての津波避難所である。市役所を除き、これらの建物は、観光局発行の観光案内にも掲載され、津波被災後のアチェは、宗教と科学（あるいは最新技術）が共存している様に描かれている。

5.1. TDMRC

津波災害緩和研究センター（TDMRC）は、インド洋津波で最も被害が大きかった村の一つ、ウレレに位置している。2004年インド洋津波と同程度の災害に耐え得る建物として建設されており、4階建の屋上へは、オートバイでも避難できるようになっている。この建物は、地元のシャー・クアラ大学の教授陣が研究員を務める減災に関連した研究施設でもある。また、様々な催しにも利用されており、地元では有名な施設となっている。もちろん、津波観光パンフレットにも掲載されている。

建物上部に設置されている英語で書かれた施設名、Tsunami and Disaster Mitigation Research Centerは、この建物がバンダ・アチェ市にある他の施設とは異なることを示している。市の公共施設名はインドネシア語やアチェ語の表記が一般的であるので、現地の人にとって、英語の施設名は目新しく、英語であることから国際性や“Barat（西洋）”との繋がりを連想させる。更に、建物名からも、また、観光案内にある建物紹介からも、この建物が研究所として科学や技術と繋がりがあることが伺える。



写真2 観光パンフレットに掲載されたTDMRCでの人々の活動(Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010:31)

津波観光パンフレットで、この施設は、「災害データや調査情報、訓練やコミュニティにおける減災の中心」(Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010:31)と紹介されている。この紹介には、住民による施設活用の様子の写真が添えられている。これらの写真は、女子を先頭に生徒たちがTDMRCを見学している様子や女性たちが会議を行っている様子を写したものである(写真2参照)。この二枚の写真では、いずれも女性は頭を覆っており、写真に写っている人々がイスラム教徒とアイデンティファイできる。また、女生徒たちが男子生徒をリードする形で避難路を歩いている姿や女性だけの会議の様子は、かつて支配者が女性であり、また、女性戦士がいたと言われるアチェらしい様子を作り出している。加えて、被災後国際的なNGOなどに批判された女性の地位の低さを押しよくする写真であるとも捉えられる。観光におけるTDMRCに関する表現は、イスラム教という宗教的要素を除けば、女性が殊更目立つものの、先進国から訪れる多くの人々にとって違和感がほとんどないものとなっている。津波博物館も同様の印象を作り出す。

5.2. 津波博物館

被災後数年してオープンした津波博物館は、大災害を知りそこから学ぶということを目的として建設されたものである。この施設のもう一つの重要な役割は、「津波災害に直面したアチェ社会の力のシンボル」となることである。

単に防災や減災を目的とした博物館というよりも、被災地がアチェ社会であることを強く意識した施設となっている。それは、博物館の外観にも表れている。この建物のデザインは、津波とアチェ文化が融合したものとなっているのである。博物館の外観は、アチェの古いタイプの家屋を模した高床式となっており、その壁面には、アチェ舞踊の型をデザインとして取り入れ、屋上部は、渦巻く波の形を図案化している。これに加え、この博物館は、実質的には津波からの避難施設としても機能するようになっている (Museum Tsunami Aceh n.d.)。

こうした建物の外観とともに博物館内部も、工夫をこらした造りになっている。入口前で手荷物を預け、来館者が最初に入るのは、津波の追体験スペースである。来館者は、左右に水が流れ、音が反響する暗く狭い螺旋状の通路を進んで行くことで、津波に巻き込まれた際の象徴的な体験をする。そこを出ると、壁面に犠牲者の名前が浮かび上がった円筒状の空間に進む。天井には、アッラーを表すアラビア文字が浮かび上がっている。その隣にあるより暗い空間には、被災時や被災直後の様子が映し出されている画面がいくつも設置されている。こうした空間は、幻想的である一方、技術を駆使して作り上げた空間という印象を与える。

次に、頭上に様々な国旗と平和を意味する外国語が吊り下がった水上に架かる通路を通り、来館者たちは、博物館2階、3階の展示スペースに赴くことになる。津波博物館オープン当時は、2階のパネル展示のみが来館者の注目を引いた。科学的な展示ばかりがあった3階の展示室には、人はまばらであった。しかし、リニューアル・オープンした2011年以降、津波被災の際の様子を映した映像を上映しているシアターが完成し、また、3階の展示も充実し、来館者を多く集めることとなった。3階の科学的展示スペースには、実際のバンダ・アチェを縮小した模型やマグマまで見ることのできる地

球儀、津波発生シミュレーション装置や震度体験ができるスペース⁽⁶⁾といった科学的・体験的な展示に加え、津波で破壊されたバイクや津波が襲来した時間を刻んだまま止まった時計などの災害遺物と共に、津波のジオラマが設置されている。ジオラマ前での写真撮影はよく見られる光景で、来館者の人気を集めている。

こうして津波博物館は科学や新しい技術を駆使しているという印象を与え、それは、観光パンフレットにおいて、より強調される。アチェ観光局が2010年と2011年に発行したパンフレット (Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010, Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011) を見ると、展示や体験設備に用いられている新しい技術や科学は、被災後のアチェ観光を構成する重要な要素となっているのが分かる。

津波博物館が開館した翌年、2010年に発行された観光パンフレットでは、津波博物館の紹介に5ページが裂かれている。これには、イラストが多用されている。これらのイラストは、博物館設計の際作成されたもので、写真よりも博物館のデザインの斬新さを浮かび上がらせる。建物の曲線と直線の対比や光と水が及ぼす効果が、イラストではより明瞭になっているのだ (写真3参照)。博物館ロビーにある池とその上を通っている通路の様子など、来館者が五感を通じて実際持つ感想とは異なった印象を創り出している。

また、展示室の様子にしても、実際の展示とは異なり、より洗練された、そして、近未来的な印象を与える。例えば、パネル展示は、実際とは異なり、透明な板に字や写真が浮かび上がっている様に描かれている (写真3参照)。また、いくつもの画面から災害時の様子を見ることが出来る展示室の様子は、床から伸びる細い棒一本で明るく光る画面が支えられている絵で伝えられている。実際の展示とは異なり、テレビ番組や映画で見るとより高度なテクノ

ロジーが使用された展示がなされている様に描写されているのだ。



写真3：観光パンフレットに掲載された津波博物館イラスト(Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010:27)

こうしたイラストと並んで、天井にアッラーの文字が浮かびあがる慰霊スペースのイラストも掲載されている。このイラストにしても、博物館建設のために用いられた技術を意識させるものとなっている。

観光パンフレットに掲載されているこうしたイラストは、アチェ社会でイスラム教が科学と共にあるという印象を作り出す。津波博物館は、バンダ・アチェの代表的な施設あるいは観光スポットであり、そのため、これが復興した新しいムスリム・アチェ社会のイメージ創りに少なからず貢献している。

更に、新たに津波博物館で上映されるようになったアニメーションも同様の印象を作り出している。上記のパンフレットが発行された数年後、津波博物館でいくつかのアニメーションが上映され始めた。地震・津波発生プロセスの説明や避難経路や避難時に持ち出す物、津波警報発令のメカニズムなどのテーマのアニメーションプログラムがモニターに映し出される仕組みである。中でも津波警報発令プロセスを描いたアニメーションは、SFアニメ番組の様な印象をもたらしている(写真4参照)。複数のモニ



写真4：津波博物館で上映されているアニメーション

ター画面が壁面にはめ込まれた指令室の中でパソコンに向かって働いている国家公務員たちが、地震発生後地元政府のいくつかの機関とオンラインで連絡を取り合い、迅速に津波警報を出す様子が描き出されている。そこにいる女性公務員全員が頭を覆っていることにより、その指令室自体が、イスラム社会の中にあることが分かる。津波警報発令システムが、SFアニメーション風に、それをコントロールする人々と共に描かれることにより近未来のイスラム社会という印象を伝えるのである。

5.3. 防災・減災の試み

2011年、“*Visit Banda Aceh: a spiritual gateway blessed with natural beauty* (バンダ・アチェへの訪問：自然の美に祝福されたスピリチュアルな門口)”というフレーズで、バンダ・アチェ観光年がアピールされた。観光局は、バンダ・アチェのグルメ情報を掲載した冊子、アチェ音楽のプロモーションCD、アチェの団扇、バンダ・アチェ市観光の目ぼしいスポットを網羅したパンフレットと地図、津波観光パンフレットなどを作成し、これらをセットで配布するなど、バンダ・アチェ観光に、特に、力を入れたのであった。

上記パッケージに含まれる津波観光パンフレット『津波の爪痕観光 (*Wisata Tsunami Track*)』(Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011)は、それまでの津波観光パンフレットとは異なっている。他のアチェの津

波観光案内と同様, このパンフレットも英語とインドネシア語の両方で表記されている。また, 「家に乗り上げた船」や陸に運ばれた巨大発電船が掲載されているし, 津波を契機にした紛争停止についての記述があり, これらを通して津波の破壊力や被害の大きさを示している。他の津波観光案内と同様, アチェのムスリム・アイデンティティも強調されている。しかし, このパンフレットが他のパンフレットと異なるのは, 防災・減災という観点から, イスラム教やアチェ社会を描いている点である。被災後アチェに建てられた防災・減災施設にも注目している。被害の大きさを宗教的な神秘性に結び, 神の偉大さを強調するという手法を取らないことにより, 災害からのサバイバルというメッセージを伝えやすくしていると言えるかもしれない。神秘性よりも, 実際的な側面からイスラム教が提示されているのである。

このパンフレットには, 海辺の被災地に建設された避難施設と並んで, モスクが紹介されている。避難施設は, 被災後, 高い建物や高台がない海縁の地域にいる人々が津波の際に避難するために建設されたものである。2004年12月の津波や地震と同じ規模の災害に耐えられる設計になっており, 最大500名収容できる (Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011:5-6) と説明されている。

パンフレットでは, 災害時に実際に起こった出来事から, モスクがこうした避難施設に例えられている。例えば, インド洋津波のグランド・ゼロと呼ばれた海辺のウレレ村にあるバイトゥラヒム・モスクに関して, 「[バイトゥラヒム] モスクは, 津波が起こった際, 付近の人々の避難所ともなった」 (Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011:2) と記述している。バイトゥラヒム・モスクに代表される津波によっても倒壊しなかった海辺のモスクには, 津波の直撃の中, その屋根に打ち上げられた人が助かったという事実があるため, 津

波の際の避難所としばしばみなされるのだ。

更に, パンフレットの後半にはバンダ・アチェの中心部にあるバイトゥラーマン大モスクに関しての説明がある。何百人という人々が津波の最中モスクの中や屋根の上に避難したこと, このモスクが津波犠牲者の遺体安置所, 救護所, 連絡場所となった (Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011:14-15) ことが, パンフレットには記載されている。実際, 大モスクは, 津波直後, 視界を遮る建物が無くなった町で, 被災者たちが目指した場所であった。多くの人々がここで, 親族や友人の行方を確認した。こうした事実があり, 津波災害と関連して特別な機能を担った場所として大モスクが紹介されているのである。

イスラム教を減災と結び付けて説明する記述は, パンフレットの最後のページにも見られる。「地元の知恵」と題され, イスラム教徒の習慣と関連させ次の様に紹介されている。

災害が起こりそうなとき, イスラム教徒, 特にアチェのイスラム教徒は, 「アザーン (礼拝への呼びかけ)」が響き, 「ズィキール ([アッラーや預言者に対する] 想起)」が唱えられると信じている。彼らは, 本能的に近くの大モスクに駆け込み避難するのである (Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011:18-19)。

実際, 定期的にもモスクから流されるアザーンは, コミュニティ中の人々が耳にする。こうした日常的な宗教的慣習を利用した津波警報を紹介しているのである。

このパンフレットには, 被災地で繰り返し言われている津波の予兆と津波発生時の避難の際の注意点も記載されている。こうして, 観光を通して, 防災や減災の実際的な取り組みを, 観光客にも, 地元の人々にも示すのである。

被災後10年を経て, 更に新しい取り組みがアチェでは始まっている。JICAなどの協力で, 津波博物館に避難経路のシミュレーション装置が加えられたり, 和歌山県を舞台にした「いな

むらの火」のドラマが上映されたりしている。アチェの津波観光は、常に形成・再形成を繰り返しているのである。

6. 経済発展とアチェ社会のイメージ形成

山本（2014:26）は、災害からの復興は、被災前の社会をそのまま再現することではないと指摘する。災害は、当該社会に被災前からある問題を際立たせるので、復興過程では、それに対応することが必要とされると述べる。

アチェに関して、同じ様に見てみれば、既に述べた様に、津波前にアチェにあった大きな問題は紛争であった。そして、これと関連してアチェ社会の孤立という問題もあった。しかし、被災後、紛争は終結した。様々な国から援助の手が差し伸べられ、孤立状態は終わりを告げた。復興過程では、復興景気が訪れ、アチェ社会は更なる経済発展を目指していった。

こうして見ると、アチェ社会は災害前に抱えていた問題を解決した、あるいは、解決しつつある様に見える。しかし、実際には、被災前にあった問題が、被災後のアチェ社会に影を落としていた。経済発展を求める被災後のアチェは、インドネシアの他の地域同様、外国資本の誘致に熱心になっていった（Simajuntak 2013）。しかし、外国資本は、イスラム法の施行や社会的不安定さのために、アチェへの投資を躊躇する傾向にあった（Tamindael 2010）。一方、津波観光を通して創出された新しいイスラム社会像は、こうしたネガティブなイメージを払しょくする可能性を持つ。

まず第一に、津波観光は、アチェが国際社会と繋がりを深めたこと、あるいは、排他的ではないことを明示している。津波被災以前、紛争のため国際社会から孤立する傾向にあったアチェは、被災後援助を通して様々な国との繋がりを形成・再形成していった。このことが観光パンフレットなどに繰り返し示されている。例えば、被災地やジャカルタで開催された津波援

助サミットを訪れた様々な国の政治家たちの写真である。パンフレットには、クリントン元アメリカ大統領、小泉元首相、アナン元国連事務総長、温家宝元中国首相、ハワード元オーストラリア首相等が写っている（Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh 2010:16, 17）。これらの写真は、先進国や大国の津波災害に対する関心の高さを印象付けるとともに、アチェが世界中から注目されているという意識を作り出し、国際社会とつながったムスリム社会という印象を生産する。

こうした諸外国との繋がりは、被災地の至る所にある国際NGOや二か国間協力での援助を表示する碑や看板が示している。他に、プランバナンと呼ばれるバンダ・アチェ市民が休息や運動のために訪れる広場にも同様の石碑が設置されている。広場の芝生に敷かれた石のタイルには、アチェの復旧や復興に携わった国々の旗や「平和」を意味するその国の言葉が刻まれている。同じ様に、津波博物館の水上通路の上にも、援助に携わった国の旗や平和を意味するその国の言葉が吊り下がっているのが見られる。こうして津波災害から復興したアチェは、国際的繋がりを重視するイスラム社会として表されている。これに加えて、国際社会は、アチェの平和を支持しているというメッセージをここに見ることができる。また、平和というメッセージを設置していることから、アチェ社会も平和を希求していると捉えることができる。

同様に、長年に渡って続いた紛争に由来する社会的に不安定なイメージを変更し、平和というメッセージを伝える試みが、観光パンフレットにおいてもなされている。観光局が発行する津波観光案内の中には、英語のみで書かれているメッセージも存在する。非インドネシア人を特に意識したメッセージである。被災者やアチェの人々の中で、英語に精通していない多くの人たちはこれを読む対象とはされていない。それは、津波被災を経て、アチェが平和で

自由になったというメッセージである。津波を「姿を変えた祝福」(Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011: 1) であると表現し、以下の様に被災後のアチェの平和を示している。

…アチェ人の中には、津波災害は「姿を変えた祝福」であると信じる人々もいる。内戦の際、地元の人々は、夕方の6時以降は、家に帰る途中、祈ることさえできなかった。そうでなければ、不愉快な状態に陥るかも知れなかったのである。皮肉なことに津波はアチェ人に新しい自由を与えた。だから、アチェはとて特別なのだ。いくつもの困難を経たアチェ人は、今や、より内的に強くなってきたに違いない (Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh 2011: 1)。

この記述では、GAMとインドネシア軍の間の紛争は内戦と表記され、アチェ州がインドネシアの一部であることを明確に印象付けている。その上で、この内戦が、イスラム教徒の五行のうちのひとつである礼拝の日課を果たすことさえまもなくしたと述べる。この記述に含まれる「新しい自由」という言葉は、熱心あるいは熱狂的なイスラム教徒というレッテルを貼られているアチェ人にとって、紛争が宗教的な活動を阻んでいることを示し、彼らにとっても紛争のない社会が好ましいことを示す。こうして、紛争終結に関しても、アチェ人の宗教的アイデンティティが強調され、それと共に、アチェ政府や社会が紛争に対して否定的な態度を取っていることを印象付けるのである。

7. 結び

インドネシア観光に関する研究では、ホスト社会のイメージが如何に演出されているのかが、重要な研究テーマの一つとなってきた。観光ガイドブックやパンフレットにおいて表されるホスト社会のイメージは、しばしば他者性を強調したものであった。特に、「伝統」の創造と強調により、他者イメージが生み出されて

いることが、一連の研究により示されてきた (Adams 1984, Howe 2005, Picard 1990, 1995, Salazar 2013, Volkman, 1984, 1990, 山下1996)。また、演出されたイメージがホスト社会にフィードバックし受け入れられ、ホスト社会のアイデンティティを再形成したり (山下1996)、ナショナリズムに取り込まれていく事例 (Hitchcock 2005) も報告されている。

本論で論じてきた津波観光では、観光客にとっての他者性や文化的相違よりも、ホスト社会の被災前と被災後という時間軸での相違が強調されてきた。被災後のホスト社会像の提示において、紛争やそこから派生する孤立、経済に関する問題、減災教育の不在といった過去を解決しようとする。防災・減災知識の共有、科学や新しい技術という要素、国際性や平和といったメッセージが、被災後のアチェ社会のイメージに織り込まれているのである。これらの新しい要素を包みこむのが、アチェ社会の継続性を表すイスラム教であった。

こうした社会像は、津波観光スポットを訪れる多くの観光客にとって、完全な他者像とはならない。津波観光では、外国人観光客数も増加しているものの、インドネシア人観光客数の方が圧倒的に多いのである (Badan Pusat Statistik Kota Banda Aceh 2015:248)。⁽⁷⁾ そして、この観光客数には、毎年津波博物館を訪れるバンダ・アチェ市内の学校の児童・生徒も含まれている。

しかし、一方で、津波観光を通して示される壊滅的打撃を受けた被災地の惨状を、自らが安全だと思い込んでいる場所から眺め、他人事であると考えている観光者もいる。実際、被災地では、2004年インド洋津波が100年に一度の大災害として表現されたために、被災後100年間は被災地で問題なく過ごすことができると言う人々もいた。

また、本論では論じなかったが、被災地の人々が津波観光で示されるアチェ社会像をどの

ように考えているかという問題がある。モスクが津波の打撃によっても全壊しなかったのは、その建築構造のためだという人々もいるし、津波をイスラム教の枠組みで語らない人々もいる。また、海辺に住む人々は、津波博物館のアニメーションに描かれる津波警報システムの存在を疑う。

更に、被災後の経済発展は、既に裕福だった人々を潤しているだけで、貧しい者はやはり貧しいのだという人々もいる。十分な援助を受けることができず、問題を抱えた被災者たちには、津波観光で示されたアチェ社会像は現状とは乖離した社会像でしかない。例えば、仮設住宅は、被災からそれほど時間が経っていない頃の津波観光では見学スポットに含まれていたが、2010年にもなると、仮設住宅は、観光マップにも、観光案内にも掲載されなくなった。これは、仮設住宅が撤去されたからではない。確

かに、多くの仮設住宅が撤去されたが、まだ復興住宅を得ることが出来ない被災者が住む仮設住宅はあった。津波観光スポットとして、観光案内に掲載されるウレレにも、2014年12月まで、修繕もされず、経年劣化が進んだ2棟の仮設住宅に被災世帯が取り残されていたのであった。

アチェの官製津波観光が描く復興後のアチェ社会像は、現実の被災者たちが抱えてきた問題に必ずしも対応しているとは言えない。アチェの災害観光が描くのは、政府が理想として捉えるムスリム社会である。こうした観光を、観光者や被災地の人々がどう捉えるのかということについての詳細な議論は、今後の課題である。

【付記】本研究は、部分的に科学研究費補助金(20251011)の助成を受けてなされた。

注

- (1) アチェの人々すべてが、自由アチェ運動を支持していたわけではない。アチェの公務員やエリートたちの中には、アチェがインドネシアの一部であり続けることを望んでいた者も少なくなかった(Nessen 2006)。
- (2) Balai Inongは、女性が家庭内暴力やコンフリクトの際の性暴力の被害者となってきたことを問題とし、被害者女性の救済策を模索してきた。Solidaritas Perempuanは、女性の自立を目指し経済活動を支援してきた。
- (3) 2005年にアチェを訪れたNGOやその他の援助機関、団体は400以上に上る(BPPENAS 2005)。
- (4) この看板には、「あなたはウレレ村トンコル集落地区に入っています。この地域内から何を持ち去ることも禁止します!! トンコル青年団」と書かれている。
- (5) 津波公園はその後リニューアルされた。リニューアル前は、多くの人々がパネル展示に見入っていたものであったが、リニューアル後の2013年には、リニューアルされなかったパネル展示を見学する人はほとんどいなくなった。
- (6) 地震体験装置は、多くの場合稼働していない。
- (7) 主要観光スポットである巨大発電船の2014年来場者数は、495462人(外国人19057人)(Badan Pusat Statistik Kota Banda Aceh 2015:248)、津波博物館による同年の同館来館者数は4741408人(外国人数不明)であった。

引用文献

- Adams, Kathleen M. (1984). Come to Tana Toraja, "Land of the Heavenly Kings" Travel Agents as Brokers in Ethnicity, *Annals of Tourism Research*, 11(3): 469-485.
- Anonymous (n.d.). *Bencana Alam Tsunami* (津波自然災害), no publisher.
- Badan Rehabilitasi Rekonstruksi (BRR) and World Bank (2005). *Rebuilding a Better Aceh and Nias: Stocktaking of the Reconstruction Effort*. No publisher.
- BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam (2005). *Donatur/NGO Nasional-International*

- (ドナー/国内・国際NGO), BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.
- Badan Pusat Statistik Kota Banda Aceh (2015). *Banda Aceh in Figures*, BPS kota Banda Aceh.
- Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam (2005a). *Panduan Peringatan Satu Tahun Gempa dan Tsunami di Aceh* (アチェ州地震・津波一周年記念案内), Banda Aceh: Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.
- (2005b). *Wisata Tsunami* (津波観光), Banda Aceh: Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.
- Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh (2010). *Aceh: From Tsunami Tragedy to Tsunami Tourism*. Dinas Kebudayaan & Pariwisata Aceh.
- Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh (2011). *Wisata Tsunami Track*, Banda Aceh: Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh.
- Hitchcock, Michael (2005). We will know our nation better: Taman mini and nation building in Indonesia, *Civilizations*, 52(2): 45-56.
- Howe, Leo (2005). The Changing World of Bali: *Religion, Society and Tourism*, London: Routledge.
- 今井信雄 (2000-2001). 「死と近代と記念行為」『社会学評論』51(4): 412-429.
- McGibbon, Rodd (2006). Local Leadership and the Aceh Conflict. In: Anthony Reid ed., *Verandah of Violence*, Singapore: Singapore University Press, pp.315-359.
- Miyazaki, Makoto (2015). Banda Aceh Mayor tells Tohoku to preserve ruins, *Nikkei Asian Review* April 7, 2015, <https://asia.nikkei.com/Politics/Banda-Aceh-mayor-tells-Tohoku-to-preserve-ruins>, accessed on May 30, 2018.
- Museum Tsunami Aceh (n.d.). *Museum Tsunami Aceh*, Banda Aceh.
- Nessen, William (2006). Sentiments Made Visible: The Rise and Reason of Aceh's National Liberation Movement. In: Anthony Reid ed., *Verandah of Violence*, Singapore: Singapore University Press, pp.177-198.
- Office for Cooperation of Humanitarian Affairs (2005). Indonesia, Sri Lanka, Thailand: Earthquake and Tsunami, *OCHA Situation Report* 34, <http://www.reliefweb.int/node/169972>, accessed on May 3, 2012.
- Olds, Kris, James D Sidaway, and Matthew Sparke (2005). Guest Editorial, *Environment and Planning D: Society and Space*, 23: 475-479.
- オリヴァー＝スミス, アンソニー, スザンナ・ホフマン (2002). 「序論: 災害の人類学的研究」オリヴァー＝スミス, アンソニー, スザンナ・ホフマン編『災害の人類学』明石書店, pp.7-28.
- Pezzullo, Phaelora (2009). "This is the only tour that sells", *Journal of Tourism and Cultural Change*, 7(2): 99-114.
- Reid, Anthony (2010). Aceh: Memories of Monarchy. In: *Imperial Alchemy*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 115-144.
- Ross, Philippa (2014). Why gender disaster data matters, *The Guardian* September 8th, 2014, <https://www.theguardian.com/global-development-professionals-network/2014/sep/08/disaster-humanitarian-response-data-gender>, accessed on May 30, 2018.
- 坂本真由美, 矢守克也 (2010). 「災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察」, 『自然災害科学』29(2): 179-188.
- Schulze, Kristen E. (2006). Insurgency and Counter-Insurgency: Strategy and the Aceh Conflict, October 1976-May 2004." In: Anthony Reid ed., *Verandah of Violence*, Singapore: Singapore University Press, pp. 225-291.
- 王金偉 (2015). 「中国自然災害地における負の遺産の開設に対する観光客の意識と評価」, 『観光研究』, 27(1): 41-54.
- Picard, Michel (1990). "Cultural Tourism" in Bali: Cultural Performances as Tourist Attraction, *Indonesia*, 49: 37-74.
- (1995): Cultural Heritage and Tourist Capital: Cultural Tourism in Bali, *International Tourism*. In: Edward M. Bruner, et al. eds., *Identity and Change*, London: Sage Publications, pp.44-66.
- Ricklefs, M.C. (1981). *A History of Modern Indonesia c.1300 to the Present*, Bloomington: Indiana University Press.
- Simajuntak, Hotli (2013). Investors encouraged to explore Aceh, *The Jakarta Post*, April 29, 2013, <http://www.thejakartapost.com/news/2013/04/29/investors-encouraged-explore-aceh.html>, accessed on April 29, 2015.
- Salazar, Noel B. (2013). Imagineering Otherness: Anthropological Legacies in Contemporary Tourism, *Anthropological Quarterly*, 86(3): 669-696.
- Volkman, Toby Alice (1984). Great Performances: Toraja Cultural Identity in the 1970s, *American Ethnologist*, 11(1): 152-169.
- (1990). Visions and Revisions: Toraja Culture and the Tourist Gaze, *American Ethnologist*, 17(1): 91-110.
- Wisner, Ben, Piers Blaikie, Terry Cannon, and Ian Davis (1994). *At Risk*, New York, Routledge.
- 山下晋司 (1996). 「『楽園』の創造」山下晋司編『観光人類学』新曜社, pp.104-112.
- 山本博之 (2014). 『復興の文化空間学』京都大学出版会.

